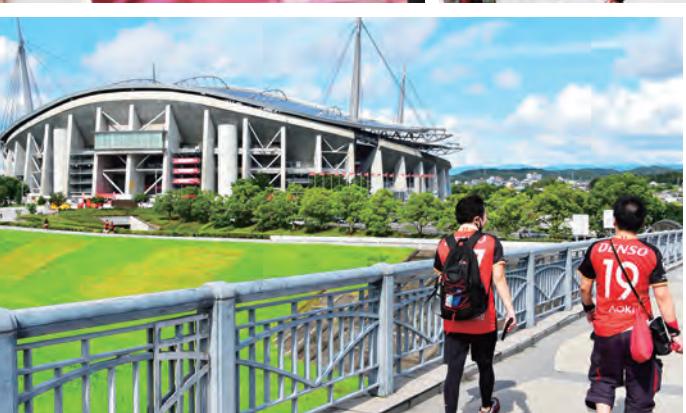




2021 J.LEAGUE™

スポーツで、もっと、幸せな国へ。Jリーグ百年構想



Jリーグ理念

- 1、日本サッカーの水準向上及びサッカーの普及促進
- 1、豊かなスポーツ文化の振興及び国民の心身の健全な発達への寄与
- 1、国際社会における交流及び親善への貢献



新しいスポーツ文化を育む年に

2021シーズンのJリーグは、新たにテゲバジャーロ宮崎を迎え、40都道府県にある57クラブとともにスタートいたします。

昨シーズンは、新型コロナウイルスの発生により長いシーズンの中止と再開を経験しました。コロナウイルスが人を媒介に増殖して人にうつすものであることから、感染対策として人ととの距離を離すことが求められた1年でした。全国のスタジアムに人々が集い交流することで活気や熱狂が生まれるJリーグもまた、多くの制限のもとでの開催となりましたが、共通のガイドラインのもとファン・サポーターの皆さんとともに1,103試合の経験を積み重ねてまいりました。

私たちは、社会的な距離をとり続けることで生じがちになるあらゆる分断こそが、本当に立ち向かうべき相手であることに気がつきました。そこで、分断を回避すべく、できる限りオープンに、メディアの皆さんのお力を借りしながら、コミュニケーションを絶やさずに、結束して立ち向かうことをよりどころとしてリーグを運営してまいりました。

経験を積み重ねながら、クラブとリーグ、選手とチーム、ファン・サポーター同士、グラスルーツとトップチーム、地域とクラブなどが、それぞのつながりを絶やすことなく、時には競技や業種を超えて連携を深め、お互いを守り合いながら、プレーをし、観戦し、運営するという新しいスポーツ文化が、少しずつ築かれつつあると感じています。

2021シーズンも引き続き、結束してコロナ対策を講じながら挑戦し、互いに守り合う文化を育んでいくことが、スポーツを続けていく上で不可欠であると考えています。安心・安全にJリーグを楽しんでいただける運営を継続し、スタジアムの外でも様々な形でJリーグを楽しんでいただける環境を整備してまいります。

今年はJ1リーグが20クラブとなり、各リーグ間の昇降格制度が復活します。いっそう激しさを増すことが予想されますが、選手たちはサッカーができる喜びと感謝を欠かさず懸命にプレーで応えてくれると信じています。Jリーグが追求するのは、タフで、フェアで、エキサイティングなプレーで沸かせるフットボールです。シーズンのどのシーンを切り取っても、最高のパフォーマンスで困難に立ち向かう姿を示し続けることで、コロナ禍の共通の困難に立ち向かう社会の活力の一部となることが、最大の恩返しとなると信じています。2021シーズンはどんな素晴らしいプレーが見られるのか、どんなドラマが待っているのか、ぜひ期待してください。

最後になりますが、Jリーグの理念にご賛同いただき、リーグやクラブを支える企業さまや自治体の皆さんに対し新たなシーズンを迎えることを心より御礼申し上げます。

スポーツを通じて思いきり喜怒哀楽を表出し、様々な交流や祝祭が回復し、クラブをきっかけに人々がつながりあって、地域の笑顔が増えて絆がより強くなっていく、そうした中で育まれるスポーツ文化を絶やさないよう、安全に、新しいシーズンを運営してまいります。

2021シーズンのJリーグを、よろしくお願ひいたします。

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ

チアマン 村井 满



2021 J.LEAGUE™



■公式試合

2021シーズンは、2020シーズンの新型コロナウイルス感染拡大による大会日程、次シーズンへの昇格・降格ルールの変更に伴い、明治安田生命J1リーグは20チーム、J2は22チーム、J3は新入会クラブのテグバジャーロ宮崎を加えた15チームで行います。

これに伴い、2022シーズンに向けたJ1・J2、J2・J3の入れ替え方法も変更となり、J1からJ2への降格、J2からJ3への降格は4クラブとなり、昇格はそれぞれ2クラブとなります。なお、J1参入プレーオフの開催はありません。

2021シーズンは、明治安田生命Jリーグ、JリーグYBCルヴァンカップ合わせて1,115試合を予定しています。

コロナ禍でありながら、安心・安全なスタジアム環境でスポーツを観る、楽しむ環境を提供し続けます。

●明治安田生命J1リーグ

20チームのホーム&アウェイ方式による2回戦総当たりリーグ戦(全38節／合計380試合)。

●JリーグYBCルヴァンカップ

J1・20チームによるリーグカップ戦。

グループステージは、AFCチャンピオンズリーグ(ACL)出場4チームを除く16チームを4グループに分け、各グループで2回戦総当たり(ホーム&アウェイ)のリーグ戦を行う。

各グループ上位2チームはプレーオフステージに進出。

同ステージ勝利チームとACL出場チームはホーム&アウェイ方式のプライムステージ(準々決勝～決勝)を実施する。ただし、決勝は1試合のみ。

なお、21歳以下の選手を1名以上先発に含めるルールは適用しない。

●FUJI XEROX SUPER CUP

前年度のJリーグチャンピオンチームvs天皇杯JFA全日本サッカー選手権大会優勝チームによる対戦(1試合)。

●明治安田生命J2リーグ

22チームのホーム&アウェイ方式による2回戦総当たりリーグ戦(全42節／合計462試合)。

【J1・J2の入れ替えについて】

●明治安田生命J1リーグにおける年間順位の下位4クラブがJ2に自動降格

●明治安田生命J2リーグにおける年間順位1位、2位のクラブがJ1に自動昇格

●J2における年間順位の上位2クラブのうちJ1クラブライセンスの交付判定を受けられなかったJ2クラブがあった場合は、次のとおりとする

- 当該J2クラブはJ1に昇格できない。この場合においてJ2における年間順位3位以下のJ2クラブがJ1に昇格することはない
- 上記に該当するJ2クラブが1クラブの場合、J1の年間順位17位のクラブは降格しない
- 上記に該当するJ2クラブが2クラブの場合、J1の年間順位17位および18位のJ1クラブは降格しない

●明治安田生命J3リーグ

15チームのホーム&アウェイ方式による2回戦総当たりリーグ戦(全30節／合計210試合)。※2021シーズンよりU-23チームの参加なし

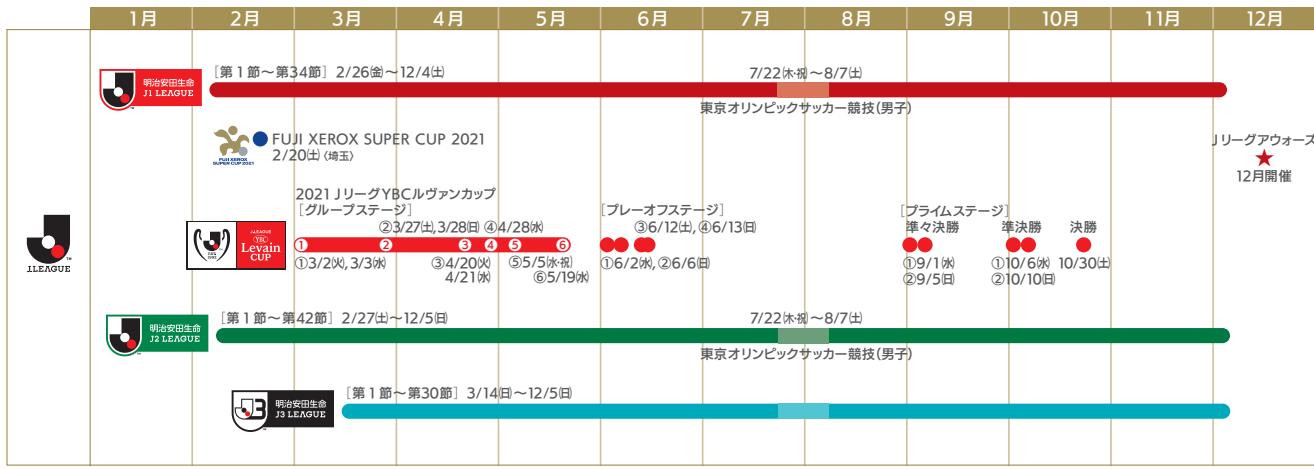
【J2・J3の入れ替えについて】

●明治安田生命J2リーグにおける年間順位の下位4クラブが自動降格

●明治安田生命J3リーグにおける年間順位1位、2位がJ2に自動昇格

●J3における年間順位の上位2クラブのうちJリーグクラブライセンスの交付判定を受けていないJ3クラブがあった場合は、次のとおりとする

■2021 Jリーグ 年間スケジュール



- 当該J3クラブはJ2に昇格できない。この場合においてJ3における年間順位3位以下のクラブがJ2に昇格することはない
- 上記に該当するJ3クラブが1クラブの場合、J2の年間順位19位のクラブは降格しない
- 上記に該当するJ3クラブが2クラブの場合、J2の年間順位19位および20位のクラブは降格しない

【Jリーグが主催するその他の大会】

Jリーグエリートリーグ、Jユースカップ、JリーグU-14、オフシーズンなどに実施する非公式試合

【Jクラブが参加するその他の大会】

天皇杯JFA全日本サッカー選手権大会
AFCチャンピオンズリーグ

●競技ルール、試合開催における変更事項

2020シーズンは、新型コロナウイルス感染症対策のため、日程変更や試合開催リスクへの対応のためのルール設定、登録ウインドーなどの既存の各種ルールの変更、感染予防のためのエントリー前検査の導入や選手交代人数を3名から5名に増やすなど、競技ルールを変更して開催いたしました。

2021シーズンは、2020シーズンに導入したルールを一部継続しながら公式試合を運営していきます。

今シーズンはさまざまなリスクによって試合開催ができなくなった場合に開催したとみなすルールを新たに設定しました。試合延期となつた場合は開催に向けて最大限の努力をした後、それでも開催できなかった場合はこのルールを適用します。

昨シーズンは各リーグから下位リーグへの降格をなくしたことにより、今シーズンは降格クラブが例年より多い4クラブとなります。例年より厳しい条件下で行われるリーグ戦において、より公正に試合を行うために、J1では昨シーズン途中で導入を中止したビデオアシスタンスリフレーリー(VAR)を改めて導入します。

なお、各大会の賞金は2019シーズンの水準に戻し、明治安田生命J1優勝賞金は3億円、JリーグYBCルヴァンカップは1.5億円となります。

●2021シーズンの大会方式、競技ルール等の変更事項

		2019	2020	2021
クラブ数	J 1	18	18	20
	J 2	22	22	22
	J 3	18	18※1	15※2
昇降格	J 2からJ 1へ昇格	2+PO	2	2
	J 3からJ 2へ昇格	2	2	2
	J 1からJ 2へ降格	2+PO	降格なし、POなし	4
	J 2からJ 3へ降格	2	降格なし	4
試合中止(延期)対応 (延期した試合の代替日設定が不可能な場合)	未開催として扱う	未開催として扱う	開催したとみなす(中止理由によって対応) ・双方無責の場合：0-0 ・一方有責の場合：有責0-3敗 ・双方有責の場合：双方0-3敗	
大会成立要件 (試合数)	基準なし	「基準試合数」以上の開催： 全試合数の75%、かつ、全クラブが50% (ホーム、アウェイ問わず)を開催	基準なし	
登録ウンドー	2回	3回※4	2回	
エントリー前検査	なし	あり	あり	
VAR (J1)	なし	休止※5	再開	
交代枠	3名	5名※3	5名 + 脳振盪1名	
飲水タイム (WBGT値は※6参照)	WBGT値規定以上で実施	WBGT値にかかわらず実施	WBGT値にかかわらず実施 ※基準未達の場合、両クラブ合意で非設定可	
ルヴァンカップU-21先発出場	適用	不適用	不適用	
賞金		2019シーズン比50%	2019シーズン水準に戻す	

※ 1：開幕当初参加を予定していたFC東京U-23は、2020シーズンはJ3不参加

※ 2：2021シーズンよりU-23チームの参加はなし

※ 3：6月以降(シーズン再開より) ※ 4：第1回がシーズン中断期間のため第3回を追加

※ 5：第1節のみ導入

※ 6：WBGT値とは気温、湿度、日射・輻射などの周辺熱環境を総合して計測する暑さ指数。JFA「熱中症対策ガイドライン」にて飲水タイムを行う際の基準が定められている。

Jクラブについて

■ 2021 Jリーグ クラブ編成

J1

- ① 北海道コンサドーレ札幌
- ② ベガルタ仙台
- ③ 鹿島アントラーズ
- ④ 浦和レッズ
- ⑤ 柏レイソル
- ⑥ FC東京
- ⑦ 川崎フロンターレ
- ⑧ 横浜F・マリノス
- ⑨ 横浜FC
- ⑩ 湘南ベルマーレ
- ⑪ 清水エスパルス
- ⑫ 名古屋グランパス
- ⑬ ガンバ大阪
- ⑭ セレッソ大阪
- ⑮ ヴィッセル神戸
- ⑯ サンフレッチェ広島
- ⑰ 徳島ヴォルティス★
- ⑱ アビスパ福岡★
- ⑲ サガン鳥栖
- ⑳ 大分トリニータ

J2

- ① ブラウブリッツ秋田★
- ② モンテディオ山形
- ③ 水戸ホーリーホック
- ④ 栃木SC
- ⑤ ザスパクサツ群馬
- ⑥ 大宮アルディージャ
- ⑦ ジュエフユナイテッド千葉
- ⑧ 東京ヴェルディ
- ⑨ FC町田ゼルビア
- ⑩ SC相模原★
- ⑪ ヴァンフォーレ甲府
- ⑫ 松本山雅FC

- ⑬ アルビレックス新潟
- ⑭ ツエーゲン金沢
- ⑮ ジュビロ磐田
- ⑯ 京都サンガF.C.
- ⑰ ファジアーノ岡山
- ⑱ レノファ山口FC
- ⑲ 愛媛FC
- ⑳ ギラヴァンツ北九州
- ㉑ V・ファーレン長崎
- ㉒ FC琉球

■ Jクラブ数に関するトピックス

● クラブ数推移



★2013シーズンにJFLとの入れ替えを実施。1クラブがJFLに降格、1クラブがJ2に昇格し、Jリーグ経験クラブは41クラブになりました。

● J1 経験クラブ: 31クラブ

● J2 経験クラブ: 46クラブ

● J3 経験クラブ: 22クラブ

● Jクラブ所在都道府県: 40都道府県



- Jリーグチャンピオン経験クラブ: 10クラブ
- ステージ優勝経験クラブ: 7クラブ



- JリーグYBCルヴァンカップ※1 優勝経験クラブ: 14クラブ



- Jリーグチャンピオン JリーグYBCルヴァンカップ※1 優勝経験クラブ: 16クラブ

※2021シーズン開幕時 ※横浜フリューゲルス含む ※1: 旧Jリーグヤマザキナビスコカップ

■ 2021クラブライセンス一覧

J 1	札幌、仙台、山形、鹿島、水戸、栃木、群馬、浦和、大宮、千葉、柏、FC東京、東京V、町田、川崎F、横浜FM、横浜FC、湘南、甲府、松本、新潟、富山、金沢、清水、磐田、名古屋、岐阜、京都、G大阪、C大阪、神戸、岡山、広島、山口、徳島、愛媛、福岡、北九州、鳥栖、長崎、熊本、大分、鹿児島、琉球
J 2	岩手、秋田、相模原、長野、藤枝、鳥取、讃岐
J 3	八戸、福島、YS横浜、沼津、今治、宮崎、青森、いわき、三重、奈良、F.C.大阪

■ 新型コロナウイルスの影響によるクラブライセンス特例措置(財務基準)について

2019年度決算および2020年度決算において当期純損失を計上しもしくは純資産がマイナスとなった場合でも、それが新型コロナウイルスによる影響であると認められる場合には、「3期以上連続で当期純損失を計上した場合」においては、当該年度をカウントせず、「純資産の金額がマイナス(債務超過)である場合」に該当する場合でも、財務基準を満たしていると判断することになります。

該当するJリーグクラブライセンス交付規則:

F.06 A 予算および予算実績、財務状況の見通し

※19年度決算および20年度決算において特例措置が認められた場合、当該年度の当期純損失および債務超過についてカウントしないものとして取り扱います。2020年度決算見込みにおいて、F.06に対する運用細則3.⑤に定める「基準F.01に対する運用細則の内容を充足する内容でないと判断される場合」に該当する場合でも、F.06を満たさないと判断されません。※④に定める「資金不足に陥る可能性または経営の継続が困難となる可能性が高いと判断される場合」に該当する場合は、F.06は満たさないものとします。

J 1	法人名	代表者	ホームタウン	活動区域	ホームスタジアム
北海道コンサドーレ札幌	(株)コンサドーレ	代表取締役社長CEO 野々村 芳和	札幌市を中心とする北海道	北海道	札幌ドーム
ベガルタ仙台	(株)ベガルタ仙台	代表取締役社長 佐々木 知廣	仙台市	宮城県	ユアテックスタジアム仙台
鹿島アントラーズ	(株)鹿島アントラーズ・エフ・シー	代表取締役社長 小泉 文明	鹿嶋市、潮来市、神栖市、行方市、鉾田市	茨城県	県立カシマサッカースタジアム
浦和レッズ	浦和レッドダイヤモンズ(株)	代表取締役社長 立花 洋一	さいたま市	埼玉県	埼玉スタジアム 2002
柏レイソル	(株)日立柏レイソル	代表取締役社長 審川 龍一郎	柏市	千葉県	三協フロンティア柏スタジアム
F C 東京	東京フットボールクラブ(株)	代表取締役社長 大金 直樹	東京都	東京都	味の素スタジアム
川崎フロンターレ	(株)川崎フロンターレ	代表取締役社長 薗科 義弘	川崎市	神奈川県	等々力陸上競技場
横浜F・マリノス	(株)横浜マリノス	代表取締役社長 黒澤 良二	横浜市、横須賀市、大和市	神奈川県	日産スタジアム
横浜F C	(株)横浜フリエスポーツクラブ	代表取締役社長兼COO 小野寺 裕司	横浜市	神奈川県	ニッパツ三ツ沢球技場
湘南ベルマーレ	(株)湘南ベルマーレ	代表取締役社長 水谷 尚人	厚木市、伊勢原市、小田原市、茅ヶ崎市、秦野市、平塚市、藤沢市、大磯町、寒川町、二宮町、鎌倉市、南足柄市、大井町、開成町、中井町、箱根町、松田町、真鶴町、山北町、湯河原町	神奈川県	レモンガススタジアム平塚※1
清水エスパルス	(株)エスパルス	代表取締役社長 山室 晋也	静岡市	静岡県	I A I スタジアム日本平
名古屋グランパス	(株)名古屋グランパスエイト	代表取締役社長 小西 工己	名古屋市、豊田市、みよし市を中心とする全県	愛知県	パロマ瑞穂スタジアム 豊田スタジアム
ガンバ大阪	(株)ガンバ大阪	代表取締役社長 小野 忠史	吹田市、茨木市、高槻市、豊中市、池田市、摂津市、箕面市	大阪府	バナソニック スタジアム 吹田
セレッソ大阪	(株)セレッソ大阪	代表取締役社長 森島 寛晃	大阪市、堺市	大阪府	ヤンマー スタジアム長居
ヴィッセル神戸	楽天ヴィッセル神戸(株)	代表取締役社長 徳島 大樹	神戸市	兵庫県	ノエビアスタジアム神戸
サンフレッチェ広島	(株)サンフレッチェ広島	代表取締役社長 仙田 信吾	広島市	広島県	エディオンスタジアム広島
徳島ヴォルティス	(株)徳島ヴォルティス(株)	代表取締役社長 岸田 一宏	徳島市、鳴門市、美馬市、板野町、松茂町、藍住町、北島町、吉野川市を中心とする全県	徳島県	鳴門・大塚スポーツパーク ポカリスエットスタジアム
アビスパ福岡	アビスパ福岡(株)	代表取締役社長 川森 敬史	福岡市	福岡県	ベスト電器スタジアム
サガン鳥栖	(株)サガン・ドリームス	代表取締役 福岡 淳二郎	鳥栖市	佐賀県	駅前不動産スタジアム
大分トリニータ	(株)大分フットボールクラブ	代表取締役社長 榎 徹	大分市、別府市、佐伯市を中心とする全県	大分県	昭和電工ドーム大分

※1: 2021年2月1日より、Shonan BMWスタジアム平塚から変更

J 2	法人名	代表者	ホームタウン	活動区域	ホームスタジアム
ブラウブリッツ秋田	(株)ブラウブリッツ秋田	代表取締役社長 岩瀬 浩介	秋田市、由利本荘市、にかほ市、男鹿市を中心とする全県	秋田県	ソユーススタジアム
モンテディオ山形	(株)モンテディオ山形	代表取締役社長 相田 健太郎	山形市、天童市、鶴岡市を中心とする全県	山形県	N D ソフトスタジアム山形
水戸ホーリーホック	(株)フットボールクラブ水戸ホーリーホック	代表取締役社長 小島 耕	水戸市、ひたちなか市、笠間市、那珂市、小美玉市、茨城町、城里町、大洗町、東海村	茨城県	ケーズデンキスタジアム水戸
栃木SC	(株)栃木サッカークラブ	代表取締役社長 橋本 大輔	宇都宮市	栃木県	栃木県グリーンスタジアム
サスパクサツ群馬	(株)草津温泉フットボールクラブ	代表取締役社長 森 統則	草津町、前橋市を中心とする全県	群馬県	正田醤油スタジアム群馬
大宮アルディージャ	エヌ・ティ・ティ・スポーツコミュニケーションズ(株)	代表取締役社長 佐野 秀彦	さいたま市	埼玉県	NACK5スタジアム大宮
ジェフユナイテッド千葉	ジェフユナイテッド(株)	代表取締役社長 森本 航	市原市、千葉市	千葉県	フクダ電子アリーナ
東京ヴェルディ	東京ヴェルディ(株)	代表取締役代行 森本 謙二	東京都	東京都	味の素スタジアム
F C 町田ゼルビア	(株)ゼルビア	代表取締役 大友 健寿	町田市	東京都	町田GIONスタジアム
S C 相模原	(株)スポーツクラブ相模原	代表取締役会長 望月 重良	相模原市、座間市、綾瀬市、愛川町	神奈川県	相模原ギオンスタジアム
ヴァンフォーレ甲府	(株)ヴァンフォーレ山梨スポートクラブ	代表取締役社長 佐久間 智	甲府市、韮崎市を中心とする全県	山梨県	山梨中銀スタジアム
松本山雅F C	(株)松本山雅	代表取締役 神田 文之	松本市、塩尻市、山形村、安曇野市、大町市、池田町、生坂村、箕輪町、朝日村	長野県	サンプロ アルワイン
アルビレックス新潟	(株)アルビレックス新潟	代表取締役社長 中野 幸夫	新潟市、聖籠町、長岡市、三条市、柏崎市、新発田市、小千谷市、加茂市、十日町市、見附市、村上市、燕市、糸魚川市、妙高市、五泉市、上越市、阿賀野市、佐渡市、魚沼市、南魚沼市、胎内市、弥彦村、田上町、阿賀町、出雲崎市、湯沢町、津南町、刈羽村、関川村、粟島浦村	新潟県	デンカビッグスワンスタジアム
ツエーゲン金沢	(株)石川ツエーゲン	代表取締役社長 米沢 寛	金沢市、野々市市、かほく市、津幡町、内灘町を中心とする全県	石川県	石川県西部緑地公園陸上競技場
ジュビロ磐田	(株)ジュビロ	代表取締役社長 小野 勝	磐田市	静岡県	ヤマハスタジアム(磐田)
京都サンガF.C.	(株)京都パープルサンガ	代表取締役社長 伊藤 雅章	京都市、宇治市、城陽市、向日市、長岡京市、京田辺市、木津川市、亀岡市、南丹市、京丹波町、福知山市、舞鶴市、綾部市、八幡市	京都府	サンガスタジアム by KYOCERA
ファジアーノ岡山	(株)ファジアーノ岡山スポーツクラブ	代表取締役 鈴木 徳彦	岡山市、倉敷市、津山市を中心とする全県	岡山県	シティライトスタジアム
レノファ山口F C	(株)レノファ山口	代表取締役社長 河村 孝	山口市、下関市、山陽小野田市、宇部市、防府市、周南市、美祢市、萩市、下松市、岩国市、光市、長門市、柳井市、周防大島町、和木町、上関町、田布施町、平生町、阿武町【山口県全県】	山口県	維新みらいふスタジアム
愛媛F C	(株)愛媛F C	代表取締役社長 村上 忠	松山市を中心とする全県	愛媛県	ニンジニアスタジアム
ギラヴァンツ北九州	(株)ギラヴァンツ北九州	代表取締役社長 玉井 行人	北九州市	福岡県	ミクニワールドスタジアム北九州
V・ファーレン長崎	(株)V・ファーレン長崎	代表取締役社長 高田 春奈	長崎市、諫早市を中心とする全県	長崎県	トランスクスモススタジアム長崎
F C 琉球	琉球フットボールクラブ(株)	代表取締役会長 廣崎 圭	沖縄市を中心とする全県	沖縄県	タピック県総ひやごんスタジアム

*2021年2月19日現在

J 3	法人名	代表者	ホームタウン	活動区域	ホームスタジアム
ヴァンラーレ八戸	(株)ヴァンラーレ八戸	代表取締役 下平 賢吾	八戸市、十和田市、五戸町、三戸町、田子町、南部町、おいらせ町、階上町、新郷村、三沢市、七戸町、六戸町、東北町、野辺地町、横浜町、六ヶ所村	青森県	プライマリースタジアム
いわてグルージャ盛岡	(株)いわてアスリートクラブ	代表取締役社長 坂本 太樹	盛岡市、宮古市、大船渡市、花巻市、北上市、久慈市、遠野市、一関市、陸前高田市、釜石市、二戸市、八幡平市、奥州市、滝沢市、零石町、葛巻町、岩手町、紫波町、矢巾町、西和賀町、金ケ崎町、平泉町、住田町、大槌町、山田町、岩泉町、田野畑村、普代村、軽米町、野田村、九戸村、洋野町、一戸町【岩手県全県】	岩手県	いわぎんスタジアム
福島ユナイテッドFC Y. S. C. C. 横浜	(株)AC福島ユナイテッド (特非) 横浜スポーツ&カルチャークラブ	代表取締役 鈴木 勇人 理事長 吉野 次郎	福島市、会津若松市を中心とする全県 横浜市	福島県 神奈川県	とうほう・みんなのスタジアム ニッパツ三ツ沢球技場
AC長野パルセイロ	(株)長野パルセイロ・アスレチッククラブ	代表取締役社長 堀江 三定	長野市、須坂市、中野市、飯山市、千曲市、坂城町、小布施町、高山村、山ノ内町、木島平村、野沢温泉村、信濃町、飯綱町、小川村、栄村、佐久市	長野県	長野Uスタジアム
カターレ富山 藤枝MYFC	(株)カターレ富山 (株)藤枝MYFC	代表取締役社長 山田 彰弘 代表取締役 鎌田 昌治	富山市を中心とする全県 藤枝市、焼津市、島田市、牧之原市、吉田町、川根本町	富山県 静岡県	富山県総合運動公園陸上競技場 藤枝総合運動公園サッカー場
アスルクラロ沼津 FC岐阜	アスルクラロスルガ(株) (株)岐阜フットボールクラブ	代表取締役 渡邊 隆司 代表取締役社長 宮田 博之	沼津市 岐阜市を中心とする全県	静岡県 岐阜県	愛鷹広域公園多目的競技場 岐阜メモリアルセンター長良川競技場
ガイナーレ鳥取	(株)SC鳥取	代表取締役社長 塚野 真樹	鳥取市、米子市、倉吉市、境港市を中心とする全県	鳥取県	A x i s バードスタジアム※2
カマタマーレ讃岐 FC今治	(株)カマタマーレ讃岐 (株)今治、夢スポーツ	代表取締役社長 池内 秀樹 代表取締役社長 矢野 将文	高松市、丸亀市を中心とする全県 愛媛県今治市	香川県 愛媛県	P i k a r a スタジアム ありがとうサービス、夢スタジアム
ロアッソ熊本 テゲバジャーロ宮崎	(株)アスリートクラブ熊本 (株)テゲバジャーロ宮崎	代表取締役社長 永田 求 代表取締役社長 二村 恵太	熊本市 宮崎市、新富町	熊本県 宮崎県	えがお健康スタジアム ユニリバースタジアム新富
鹿児島ユナイテッドFC	(株)鹿児島プロスポーツツープロジェクト	代表取締役 徳重 剛	鹿児島市	鹿児島県	白波スタジアム

※2: 2020年4月より、とりぎんバードスタジアムから変更

*2021年2月19日現在

Jリーグの世界への広がり、世界とのつながり

●世界に広がるJリーグ

2020シーズンは約30の国と地域にJリーグの試合を放映し、東南アジアを中心にJリーグの海外放映が拡大しています。

Jリーグに所属する外国籍選手の活躍を、母国で応援する動きも見られ、2020 Jリーグ最優秀選手賞受賞のオランダ選手(柏レイソル/当時)が開催した2020 JリーグYBCルヴァンカップ決勝

(2021年1月4日に開催)が海外向けにYouTubeで生配信されると、同選手の母国ケニアの首都ナイロビでは柏レイソルのレプリカユニフォームを着た大勢のファンが集まってパブリックビューイングが開かれるなど、各地で盛り上がりを見せてています。タイでは2020シーズンより3シーズン、大手スポーツメディアのSiamsportsと放映権契約を締結し、同社運営によるライブ配信、地上波公共放送局MCOTでの放映と合わせ、2020シーズンのJリーグの視聴回数は合計6,000万回近くに上りました。

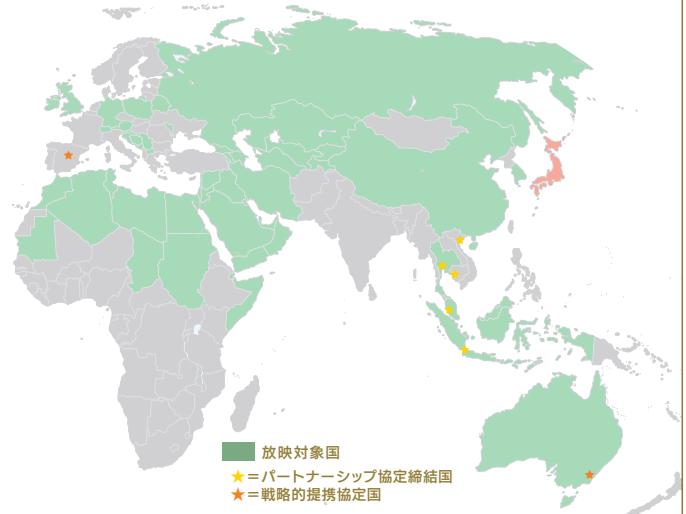
なお、2021シーズンは明治安田生命J1リーグを55の国と地域で、FUJI XEROX SUPER CUPを34の国と地域で放映を予定しています。

また、これまで合計13名の選手がJリーグでプレーしたタイでは、Jリーグの関心度はプレミアリーグ(イングランド)、ラ・リーガ(スペイン)、ブンデスリーガ(ドイツ)に次ぐ高さを誇り、国民の57%がJリーグに関心を寄せているという調査結果が出ています。

●Jリーグと世界とのつながり

Jリーグと日本のつながりに目を向けると、1,687人の登録選手の内、23の国と地域から145名の外国籍選手が所属しています。

選手を通じて選手の母国でのJリーグの関心度の向上、選手を通じた母国のファンとのコミュニケーションの促進やファン・サポーター同士の交流などを通じ、Jリーグが掲げる理念の一つである「国際社会における交流及び親善」が、実現しつつあります。



●2021シーズンJリーグ所属外国籍選手数 (J1、J2、J3合計)

2021年2月1日現在

順位	国籍	選手数
1位	ブラジル	83
2位	大韓民国	22
3位	スペイン	6
5位	ナイジェリア	6
	オーストラリア	3
	オランダ	3
8位	セルビア	3
	タイ	2
	ノルウェー	2
	ベルギー	2

1名 : イングランド、ウルグアイ、ケニア、コスタリカ、コロンビア、スウェーデン、中華人民共和国、ドイツ、パラグアイ、ポーランド、ボスニア・ヘルツェゴビナ、マレーシア、モザンビーク

2021 Jリーグトピックス

■2021シーズンで達成されそうな記録

2018シーズンにガンバ大阪 遠藤保仁選手がフィールドプレーヤーで初めて通算試合600出場を達成したのに続き、浦和レッズ 阿部勇樹選手があと23試合で史上3人目の通算600試合出場を達成します。

また、西川周作選手(浦和)はあと10試合で通算500試合出場、興梠慎三選手(浦和)は、あと11試合で史上12人目の通算450試合出場達成となります。通算得点ランキングでは、大久保嘉人選手のセレッソ大阪移籍に伴うJ1復帰によって、さらなる記録更新が期待されます。また、興梠選手はあと5得点で通算得点記録第2位(佐藤寿人氏/161得点)を更新、あと29得点で現在1位の大久保選手の持つ最多記録185得点を更新します。(選手の所属は2021年2月19日現在)

●通算出場ランキング(350試合以上／現J1所属選手)

選手名	所属	試合数	記録達成の可能性
阿部 勇樹	浦和	577	通算600試合まであと23試合
西川 周作	浦和	490	通算500試合まであと10試合
興梠 慎三	浦和	439	通算450試合まであと11試合
中村 俊輔	横浜FC	396	通算400試合まであと 4試合
柏木 陽介	浦和	392	通算400試合まであと 8試合
青山 敏弘	広島	389	通算400試合まであと11試合
森重 真人	FC東京	375	通算400試合まであと25試合
大谷 秀和	柏	374	通算400試合まであと26試合
槙野 智章	浦和	368	通算400試合まであと32試合
渡邊 千真	横浜FC	351	(通算400試合まであと49試合)

●通算得点上位ランキング

選手名	最終所属	得点	シート数	試合数	出場時間(分)	1試合平均
大久保 嘉人	C大阪	185	1,108	448	34,826	0.413
佐藤 寿人	千葉	161	717	404	29,899	0.399
興梠 慎三	浦和	157	637	439	31,476	0.358
中山 雅史	沼津	157	743	355	26,451	0.442
前田 遼一	岐阜	154	700	429	32,082	0.359
マルキニーヨス	神戸	152	1066	333	27,608	0.456
三浦 知良	横浜FC	139	814	325	26,384	0.428
ウェズレイ	大分	124	868	217	19,052	0.571
小林 悠	川崎F	120	618	286	19,832	0.42
ジュニーニョ	鹿島	116	843	264	20,901	0.439
エジミウソン	C大阪	111	705	236	19,473	0.47
柳沢 敦	仙台	108	572	371	24,437	0.291
遠藤 保仁	磐田	103	818	641	55,043	0.161
藤田 俊哉	千葉	100	637	419	34,731	0.239
渡邊 千真	横浜FC	100	613	351	22,311	0.285
玉田 圭司	長崎	99	622	366	27,456	0.27
豊田 陽平	鳥栖	98	467	298	19,971	0.329

●通算成績(勝利数上位ランキング/現J1クラブ)

チーム	勝利数	分	敗戦数	得点	失点	
鹿島	527	136	289	1,640	1,133	550勝まで23勝
横浜FM	464	165	323	1,491	1,163	500勝まで36勝
浦和	429	150	343	1,433	1,242	450勝まで21勝
G大阪	424	137	357	1,574	1,366	450勝まで26勝
名古屋	418	140	360	1,401	1,305	450勝まで32勝
清水	404	143	371	1,334	1,351	425勝まで21勝
広島	384	142	362	1,294	1,196	400勝まで16勝
柏	338	131	301	1,181	1,117	350勝まで12勝
川崎F	292	120	162	1,047	743	300勝まで 8勝
C大阪	280	112	280	1,024	1,029	300勝まで20勝
FC東京	278	142	240	912	838	300勝まで22勝
神戸	234	146	342	959	1,173	250勝まで16勝
湘南	149	56	255	596	828	150勝まで 1勝
仙台	139	109	186	530	624	150勝まで11勝
鳥栖	108	81	117	355	400	150勝まで42勝
大分	99	80	153	356	457	100勝まで 1勝
札幌	85	47	166	379	548	100勝まで15勝
福岡	71	28	189	313	567	100勝まで29勝
横浜FC	13	10	45	57	126	25勝まで12勝
徳島	3	5	26	16	74	10勝まで 7勝

● J1監督勝利数ランキング

順位	監督名	最終所属	勝利数	試合数	試合数 ランク	J1 年間優勝
1	西野 朗	名古屋	270	524	1	2005(G大阪)
2	長谷川 健太	FC東京	204	442	3	
3	ペトロヴィッチ	札幌	203	450	2	
4	ネルシーニョ	柏	188	405	4	2011(柏)
5	トニーニョ セレーズ	鹿島	141	272	6	2000、2001(鹿島)
6	城福 浩	広島	105	283	5	
6	オズワルド オリ维エイラ	浦和	105	208	13	2007、2008、2009(鹿島)
8	風間 八宏	名古屋	104	223	9	
9	ストイコビッチ	名古屋	103	204	16	2010(名古屋)
10	ハンス オフト	磐田	100	209	11	

■Jリーグオフィシャルネーム&ナンバーを導入

Jリーグは、2021シーズンよりJリーグ公式試合に出場する選手が着用するユニフォームに表示する「選手番号および選手名」の書体デザインを全クラブで統一し、「Jリーグオフィシャルネーム＆ナンバー」として導入することを決定しました。採用する書体は、北欧で最大級のプランディングエージェンシーであるKontrapunkt(コントラpunkt)社による、視認性に配慮したユニークなデザインを取り入れたJリーグオリジナルのデザインとなり、書体名称は「J.LEAGUE KICK」となります。

● 視認性向上の取り組みについて

これまでのネーム＆ナンバーのデザイン選定には視認性を確保するための基準などが明確に定められておらず、観戦・視聴環境によっては背番号の視認が困難な場合もありました。今シーズンよりユニバーサルデザインを取り入れた統一デザインを採用することで、使用するネーム＆ナンバーとユニフォームとのカラーコントラストに一定の基準を設け、Jリーグ公式試合全体の観戦・視聴環境の向上につなげていくことを目指しています。



●導入対象試合

Jリーグ公式試合

* Jリーグ規約に定められた「公式試合」の規定に準ずる

明治安田生命Jリーグ（J1、J2、J3）、JリーグYBCルヴァンカップ、FUJI XEROX SUPER CUP、J1参入プレーオフ（2021シーズンは開催なし）

●書体名称 J.LEAGUE KICK (Jリーグ キック)

●使用カラー 白・青・赤・黒・黄

●デザイン Kontrapunkt (コントラ puncto)

監修

デザイン/プランディングサポート株式会社Takram(タクラム)

●カラーユニバーサルデザインサポート

NPO法人大カラーユニバーサルデザイン機構(CUDO)

●企画・統括

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ（Jリーグ）

株式会社 Jリーグ

●製作

株式会社 Jリーグ／エイブリィ・デニソン・ジャパン株式会社

Jリーグが取り組む各種事業

Jリーグはプロサッカーリーグを運営する一方で、Jリーグの理念を実現するために多岐にわたる事業・活動を行っています。

トップカテゴリーのリーグ戦を行い、日本サッカーをより強くしていくための選手育成活動や指導者養成活動。地域に根差したスポーツ文化を醸成するための様々な活動。Jリーグが安定的に活動を継続するための経営基盤の確立や、より多くの方にJリーグに関心を持っていただくための活動など。理念を実現するための具体的な理想像を「ビジョン2030」として定め、各分野で中長期的な計画を策定して事業を推進しています。

■ビジョン2030

Jリーグは、Jリーグの理念の実現に向け、具体的に2030年に実現したい状態を「社会連携」「フットボール」「ファンづくり」「事業強化」「経営基盤」の分野に分け、「ビジョン2030」として定めました。

「ビジョン2030」の実現に向けて、2019年から2022年の4年間で成長エンジンを作るという「中期計画2022」を定め、ビジョンを実現するための戦略を設定していましたが、昨年、新型コロナウイルスの感染拡大と、それに伴うリーグ戦の中止、感染症対策を中心とした予算の見直しを行い「中期計画2020」を凍結させるという決断をせざるを得ませんでした。

しかし、Jリーグがこれまで多くの方々に支えられながら推進してきた事業や、築き上げてきたスポーツ文化を絶やさず、少しでも前進するために、各分野の事業は当初の目標設定や予定を変更しながら続けてまいります。

ビジョン2030 KGI：J1全試合満員 [来場可能数の80%以上]

目指す状態

社会連携	Jリーグが 社会の多様なつながりの きっかけとして定着	想いを共有し 仲間のチカラを借りて 地域とクラブのつながりと 笑顔を増やす
フットボール	Jリーグに 世界的選手を輩出する グレートアカデミーがある	日本型育成システムで 世界の5大リーグに 名を連ねる
ファンづくり	地域や場所を問わず より多くの方にJリーグを 楽しんでもらえる基盤がある	熱狂のスタジアム 国内最高のスポーツ エンタテインメントへ
事業強化	Jリーグから より多くのビジネスを うみだしている	事業の選択肢を増やす Jリーグの多様な価値を マネタイズする
経営基盤	Jリーグの経営を 担える人材がいる	自律的な経営と人材育成で 地域に愛される存在となる



■2021年度の事業スケジュール(スケジュールは変更になる場合があります)

月	大会	事業スケジュール
1月	●eJ.LEAGUE	●実行委員会 ●理事会 ●NPB・Jリーグ連絡会議(2回)※
2月	●2/20(土) : FUJI XEROX SUPER CUP ●2/26(金) : 明治安田生命 Jリーグ開幕	●新人研修会 ●NPB・Jリーグ連絡会議 ●実行委員会 ●理事会
3月	●3/2(火) : ルヴァンカップ開幕	●Jエリートリーグ、Jユースリーグ開幕(仮) ●NPB・Jリーグ連絡会議(2回予定) ●実行委員会 ●理事会 ●総会
4月	●AFCチャンピオンズリーグ(ACL)開幕(予定)	●NPB・Jリーグ連絡会議 ●ホームタウン活動報告(予定) ●実行委員会 ●理事会
5月	●ルヴァンカップ グループステージ終了 ●ACL グループステージ終了	●5/15(土) : Jリーグの日 ●シャレン！アウオーズ(仮) ●クラブ経営情報開示(速報) ●NPB・Jリーグ連絡会議 ●実行委員会 ●理事会
6月	●ルヴァンカップ プレーオフステージ	●実行委員会 ●理事会 ●6月末 : クラブライセンス申請締め切り
7月	●東京オリンピック	●実行委員会 ●理事会 ●クラブ経営情報開示(最終)
8月	●東京パラリンピック	
9月	●ルヴァンカップ準々決勝 ●ACLラウンド16、準々決勝	●実行委員会 ●理事会 ●9月末 : クラブライセンス交付
10月	●ルヴァンカップ準決勝 ●ACL準決勝 ●ルヴァンカップ決勝	●実行委員会 ●理事会
11月	●ACL決勝	●実行委員会 ●理事会
12月	●明治安田生命 Jリーグ終了 ●Jリーグアウオーズ	●実行委員会 ●理事会

※NPB・Jリーグ新型コロナウィルス対策連絡会議／6月以降の開催については未定
6月以降の実行委員会、理事会のスケジュールは変更となる可能性があります。

■Pick Up

- 「FIFA 21グローバルシリーズ e Jリーグ powered by ひかりTV」開催(2020年12月～2021年1月)
Jリーグは、新たなスポーツ分野への挑戦として、2018年よりeスポーツに参入し、エレクトロニック・アーツ社(EA)のゲーム「EA SPORTSTM FIFA」シリーズを用いたeスポーツ大会を「eJ.LEAGUE」として開催しています。

本大会は、2018年より国際サッカー連盟(FIFA)が開催する「EA SPORTSTM FIFA」シリーズを用いた「eWorld Cup」の出場権をかけた予選大会、または出場資格を得るためのポイント取得を可能とする大会「EA SPORTSTM FIFAグローバルシリーズ」に指定され、世界につながる大会として位置付けられています。

2020年度は当初の予定からスケジュールや大会方式を変更したものの、2020年12月～2021年1月にかけて「FIFA 21グローバルシリーズ e Jリーグ powered by ひかりTV」として開催しました。

近年ではJクラブのeスポーツ参入も活性化し、eスポーツ選手を保有するクラブも増加。中にはFIFA主催の国際大会で活躍する選手も現れ、eスポーツを通じてサッカーやスポーツ以外のジャンルへの挑戦、スポーツの新しい楽しみ方の提供など、その可能性は広がっています。

●シャレン！アウオーズ(5月予定)

Jリーグは社会課題や共通のテーマに、Jリーグ・Jクラブが複数の企業や団体、地域と取り組む社会連携活動を「シャレン！活動」と銘打ち、2018年から本格的なシャレン！活動の活性化に取り組んでいます。

2020年の全クラブ社会連携(シャレン！)活動の中から、特に社会に幅広く共有したい活動を「2021 Jリーグシャレン！アウオーズ」として表彰し、今年も5月中旬に発表、表彰予定です。昨年ソーシャルチャレンジャー賞を獲得した大宮アルディージャの「手話応援デー」など、受賞年度だけでなく、障がいがある方とともにスタジアムでサッカーを楽しむ取り組みを10年以上継続し、地域に欠かせない存在となっている取り組みもあります。今後も表彰を通じてJリーグ、Jクラブが取り組む「シャレン！活動」を広く社会に伝えていきます。(社会連携活動についてはP14以降をご参照ください。)

●育成年代の大会を刷新。Jエリートリーグ、Jユースリーグを開催

Jリーグは、「2030 Jリーグフットボールビジョン」に基づいた活動の一環として、育成年代の試合環境の整備を行い、2021年度よりU-21以下の選手を対象とした「Jエリートリーグ」の開催、「Jユースカップ Jリーグユース選手権大会」をリニューアルしたU-17以下の選手を対象とした「Jユースリーグ」を開催します。併せて2008年より開催する「JリーグU-14」も開催します。

日本国内ではJリーグを頂点としたトップリーグから、U-18、U-15を対象にした育成年代の大会が充実して開催されている中、試合出場機会の少ない若手プロ選手や、U-17年代、U-14年代を対象とした大会を開催することで、あらゆる年齢の選手の試合機会の創出を図ります。(フットボール事業に関する詳細はP10～13以降をご参照ください。)



Jリーグが取り組むフットボール事業について

はじめに

Jリーグは「ビジョン2030」のフットボール領域において目指す姿として、「Jリーグに世界的な選手を輩出するグレートアカデミーがある」「日本型人材育成システムで世界の5大リーグに名を連ねる」と定めています。ビジョン実現のため「世界で最も人が育つリーグ」を合言葉に、選手育成環境の向上から、トップの強化まで、育成と強化のサイクルを循環させる施策を実践しています。

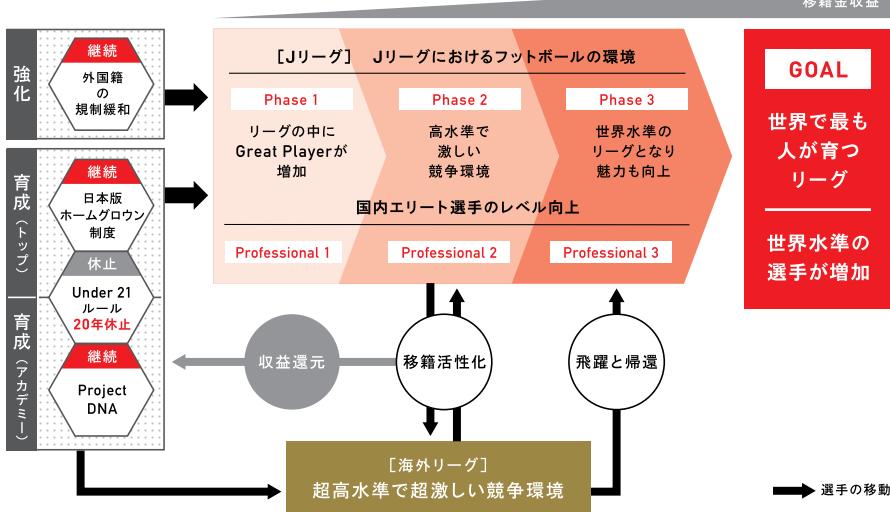
日本最高峰のサッカーリーグであるJリーグでは、これまで自クラブで育った選手を起用するホームグロウン制度、外国籍選手枠の増加などによる強化施策や、J1へのビデオアシスタントレフェリー(VAR)の導入によるフットボールの水準向上を図ってきました。

育成面では2019年より「プロジェクトDNA」を導入し、育成にかかる人材の養成、アカデミー評価基準などによる育成環境の評価や、クラブの育成理念を明確化し、実際の育成活動への反映に取り組んでいます。

世界で最も人が育つリーグの実現に向けたプロセス

2030 Jリーグフットボールビジョン「世界で最も人が育つリーグへ」を実現するために、アカデミーの選手育成とトップの強化のサイクルを循環させる事業モデルを設定しています。

外国籍選手枠の増加、J1へのVAR導入などのトップへの対応と、Jクラブアカデミーをアカデミー評価システムによって評価、サポートし、選手育成に関わる優秀なフットボール人材の養成、選手の育成を行っています。育った選手が高水準の試合機会を得るためにホームグロウン制度の導入、U-21選手出場を奨励するなど、各分野の成果を有機的に循環させ、ビジョンの実現を目指しています。



Process 1: 育成の成果を国内強化策で加速させる

Jクラブの育成年代の選手たちが、年齢カテゴリーを超えて活躍する土壤をつくり、トップカテゴリーが育成年代の強化の場でもあると見える。若年層のうちに国内のみならず海外での活躍も積極的に促し、日本サッカーの水準の底上げを図る。

Process 2: 日本と世界のボーダーレス化を促進

選手の海外進出を促し、さらに海外で活躍した選手が再び日本で活躍する、といった国境を越えた選手強化のサイクルをつくり、選手育成・強化のボーダーレス化を促進する。

■プロジェクトDNAとは

2019年よりスタートした育成の重点施策を実施するプロジェクトです。

「選手や指導者が本来持っているさまざまな資質を紡ぐ」というコンセプト「Developing Natural Abilities」の頭文字をとって「プロジェクトDNA」と名付けています。

このプロジェクトを通じて、進化し続ける世界のサッカーに見合った指導者や選手を育成することを目的とし、日本独自の文化や環境を十分に考慮して日本人のDNAとして受け継がれるアイデンティティーをベースに日本型人材育成システムの確立に向けて取り組んでいます。



【プロジェクトDNAにおける6つの重点施策】

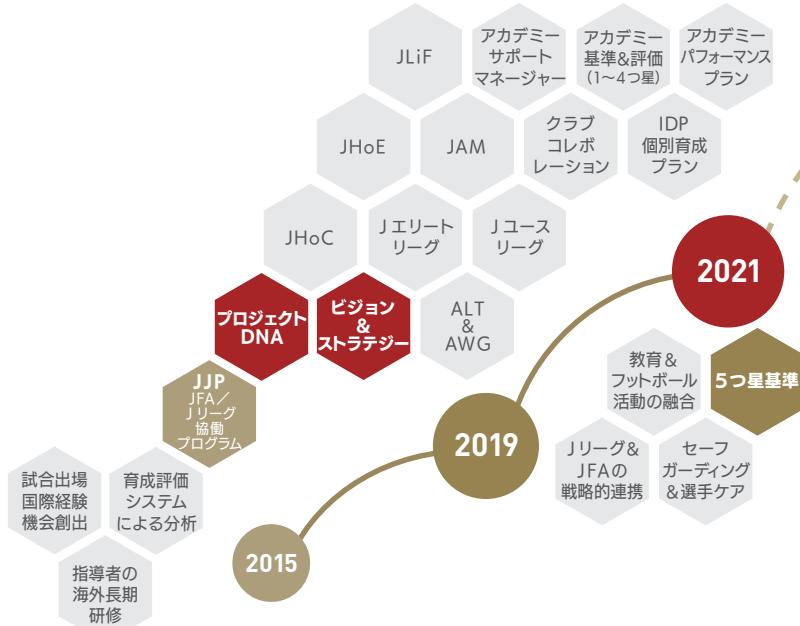
- ①ビジョン&ストラテジー：ビジョン達成に向けた戦略立案
- ②人材育成：JHoC、JAM他
- ③サポート：パフォーマンス・プラン、IDP他
- ④評価：品質保持のための制度作り
- ⑤ゲーム：試合環境整備
- ⑥選手教育：JHoE、新人研修、プレプロ研修、よのなか科など

■ フットボールビジョンの成長曲線

Jリーグが選手育成・強化において重視しているのは、すでに定めているベンチマークに向けた成長曲線と、そのベンチマークの先の目標、ビジョンに向けて定める成長曲線、すなわち「セカンドカーブ」を同時に意識してプロジェクトに取り組むことです。

目標達成後にプロジェクトのペクトルが現状維持の水平線や下降線をたどることにならないよう、連続した成長曲線を描くための新たな目標を常に定めながらプロジェクトを進めていきます。

JリーグやJクラブがこれまで取り組んできた選手育成・強化、指導者養成の実績を、大きな成長曲線を描くジャンプアップのための十分な助走ととらえ、プロジェクトDNAの導入によってセカンドカーブを意識した、連続した成長を実現させることで、「ビジョン2030」の達成を目指します。



■ 2021年度の活動～計画から実行のフェーズへ

2021年は、JHoC第1期修了生11名が、養成コースの学びを生かし、各クラブのフィロソフィーのもとで実践する年となります。また、昨年新型コロナウイルス感染症拡大の影響で実施できなかったJエリートリーグや育成年代の大会を開催する、計画から実行のフェーズに移行する年となります。

フットボール事業として取り組む事業は、プロジェクトDNAの成功に不可欠な要素に基づいて設計されています。

2021年度のフットボール事業

【主な事業内容】

- ビジョン&ストラテジー**
 - Project DNA-to the FUTURE発行 ①
 - Jリーグリーダーズインフットボールイベント (JLiF) ②
- 人材育成**
 - Jリーグヘッドオブコーチング養成コース (JHoC)
 - Jリーグアカデミーマネジメント人材養成コース (JAM) ④⑤
- サポート**
 - アカデミーサポートマネージャー (ASM)によるクラブサポート ④⑤
- 評価**
 - Jリーグアカデミー評価制度 ⑥
- ゲーム**
 - Jエリートリーグ
 - Jユースリーグ
 - JリーグU-14 ⑦
- 教育**
 - Jリーグヘッドオブエデュケーション養成コース (JHoE) ③
 - 年間教育プログラム (Jリーグ新人研修/クラブ内研修) ④
 - プレプロフェッショナル研修/Jリーグ版よのなか科

【プロジェクト成功に不可欠な要素】

- ①ビジョン&ストラテジー
- ②戦略的投資による投資利益を得るためにビジネスプラン
- ③日本の育成年代の取り組みを担うリーダーを輩出
- ④Jリーグ独自の個別育成プランを全クラブのスタッフ養成および選手育成に普及
- ⑤各アカデミー独自のパフォーマンスプランの策定
- ⑥Jリーグ独自のアカデミー評価制度により評価基準を設定
- ⑦世界水準にある欧州トップクラブや日本代表で活躍する若い日本人選手を増やす

2021年度のフットボール事業活動詳細

■試合出場機会の創出

～ストレッチと統合のモデルをつくる

これまで育成年代においては、年代別の大会を開催し、主要大会を短期的なトーナメント戦からリーグ戦に移行するなど、シーズンを通じて試合を開催することで試合出場機会を創出してきました。これにより、U-18、U-15カテゴリーではリーグ戦や各種大会が充実してきましたが、育成年代の選手を強化するためにはまだ課題があります。

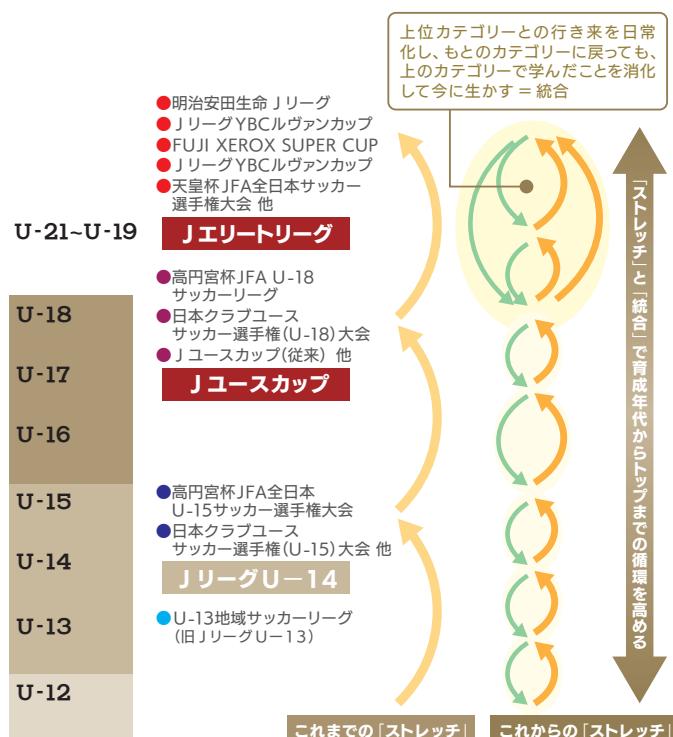
年代別の大大会では、各年代の年長選手がチームの中心となり、以下の年齢の選手が出場機会を得られにくいこと。「飛び級」で上のカテゴリーに出場する選手数は限られ、仮に「飛び級」をしても、身体的な差によって実力を発揮できない、負傷によって選手としての可能性を失ってしまう場合があるといったリスクがあること。上のカテゴリーでの課題を、元のカテゴリーに戻ったときに解消する仕組みがない、などです。また、ユース年代を卒業した22歳以下の若年層のトップカテゴリーの選手においても試合出場機会の創出は、長年の課題でもあります。

世界を見渡すと、ワールドクラスの活躍をする選手は年々若くなっています。Jリーグが世界に伍するリーグとして、世界的な選手を多数輩出するためには、育成年代の選手、若年層のトップカテゴリーの選手が恒常に試合出場機会を得られ、適切なレベルで試合経験を積む環境を整備することは不可欠であり急務であるといえます。

●「ストレッチ」と「統合」

この課題を解決するために、全ての年齢の選手に試合機会をつくり、「飛び級」となる「ストレッチ（背伸び）」の幅を適切にすること。多くの選手にストレッチをするチャンスを与え、常に高いレベルで試合をする機会を創出する必要があります。そして、ストレッチによって上のカテゴリーに出場した選手が、仮に自分のカテゴリーに戻った時には、上のカテゴリーでの課題が適切に解決できること。トップカテゴリーから下のカテゴリーまでの循環を「統合」して強化のサイクルを推し進めること。これを実現するために、2021年度は若年層の大会創出、育成年代の大会改革に着手します。

【年代別大会構造と「ストレッチ」と「統合」のイメージ】



●若手の育成を加速する～Jエリートリーグを開催

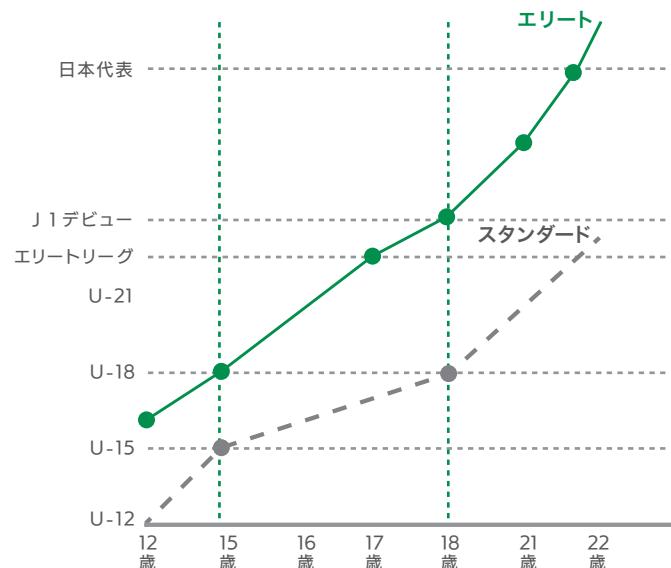
「若手の育成を加速する」ことを目的に、21歳以下の選手を対象としたリーグ戦を、年間を通じて開催します。

2014年にスタートした明治安田生命 J3リーグでは、22歳以下の選抜チームや、J1クラブのU-23チームが参加し、これにより参加クラブの若手選手に常にトップカテゴリーの試合出場機会を創出することができました。さらには、トップの若手選手だけでなく、U-18チームの選手たちがプロと同じ舞台で試合ができるなど、参加した選手やクラブにとって非常に価値ある機会となりました。Jエリートリーグは、この機会をさらに多くのクラブが得られるよう、希望するクラブが参加できるリーグ戦となります。

Jエリートリーグは出場クラブをエリアごとに分類してリーグ戦を実施します。日程や移動の負担を縮小しながら、日常的な試合出場機会の創出を実現します。さらには、ユース年代の選手の「ストレッチ」の場となることも期待しています。

育成年代の中に、Jエリートリーグでトップチームに所属する選手との試合出場機会を持ち、さらにその上のJリーグで活躍する選手となる可能性を伸ばす大会としても位置付けています。

【選手の成長曲線イメージ】



●全ての年齢の選手に試合出場機会を～Jユースカップをリニューアル

今シーズンより、ユース年代の三大タイトルの一つとしてJリーグ開幕年より開催してきた「Jユースカップ Jリーグユース選手権大会」をリニューアルして開催します。

Jユースカップは、Jクラブのユース(U-18)チームと、日本クラブユースサッカー連盟所属チームを若干数加えたノックアウト方式のトーナメント戦を行ってきました。2021年からは、Jクラブのユースチームを対象に、エリアごとのグループステージ(リーグ戦)を行い、グループステージの上位チームによるノックアウト方式のトーナメント戦を行います。試合数を増やすことで試合出場機会を増やすだけでなく、対象年齢を18歳以下から17歳以下とし、試合出場機会が少ない選手の出場機会を創出します。これにより、ユース年代より下の年齢の選手の「ストレッチ」の場となることも期待しています。

* JエリートリーグとJユースカップの詳細は2021年3月に発表します。

●これまでの育成年代の強化について

Jリーグは、2002年から「Jリーグアカデミー」の確立を目指し、本格的な選手育成活動に取り組んでいます。2007年には育成年代の大会で出場機会が得られにくい13歳以下の選手を対象としたJリーグU-13、翌年からJリーグU-14を創設しました。(U-13は2014年よりJFA主管でU-13地域サッカーリーグとして開催)。二つの年代のシーズンを通じたリーグ戦の他、U-16チャレンジリーグ、U-17チャレンジカップを短期的に開催するなど、U-18のJユースカップを頂点に育成年代の大会を開催し、試合出場機会を創出してきました。

同時に国際試合出場機会の創出や、海外でサッカーをする機会を創出するために、U-18以下の各年齢の選抜チームによる海外キャンプや、海外クラブを招聘し、U-16チャレンジカップへの招待や、U-17インターナショナルユースカップを開催してきました。また、JJPの一環として、Jクラブの海外キャンプや海外での大会開催に対する経済的な援助を行いました。

■Jリーグの人材育成プログラム

「優秀な人材の育成」と「継続学習の機会」のために、Jリーグは2019年より独自の3つの人材養成コースと1つのCPD(専門性を維持するための継続学習)の機会を提供しています。

「Jリーグヘッドオブコーチング養成コース(JHoC)」、「Jリーグアカデミーマネジメント人材養成コース(JAM)」、「Jリーグヘッドオブエデュケーション養成コース(JHoE)」の3つの人材育成コースに加え、2021年はサッカー界のリーダーを対象にした「Jリーグリーダーズインフットボールイベント(JLiF)」を充実させ、育成年代における将来のリーダー育成やエリートを育成する文化を醸成し、クラブにおいて「より良いコーチがより良いプレーヤーを育成する」文化を定着させることを目指します。

また、サッカー界をリードする人材育成の取り組みを通じて、Jリーグの全関係者のつながりを構築し、革新的で「世界をリードする」学習機会を経て、ビジョン2030の実現をもたらすスキルや知識をJリーグの育成年代の関係者とフットボールのリーダーに提供することを目指します。世界のフットボール界で認められる選手育成の先駆者および将来のリーダーを輩出したいという思いがJリーグの人材育成プログラムの原動力となっています。

【3つの人材養成コースとCPD】

	J.League Head of Coaching Course (JHoC) Jリーグヘッドオブコーチング 養成コース Jクラブで育成年代のコーチを育てる人材 (HoC) を養成
	J.League Academy Management Course (JAM) Jリーグアカデミーマネジメント人材 養成コース Jクラブのアカデミーをマネジメントする人材 (JAM) を養成
	J.League Head of Education Course (JHoE) Jリーグヘッドオブエデュケーション 養成コース Jクラブで選手教育を担う人材 (HoE) を養成
	J.League Leaders in Football Events (JLiF) Jリーグのフットボールにおけるリーダーに向けたイベント Jクラブの経営層、HoCなどを対象としたオンラインセミナー

●JAM、JHoCを通じた選手育成のストラテジーづくり

Jリーグヘッドオブコーチング養成コース(JHoC)、Jリーグアカデミーマネジメント人材養成コース(JAM)では、受講者はクラブのビジョンとストラテジーに基づいたマネジメントや選手および指導者の育成を実践することを学びます。

2019年から始めたJHoC第1期生11名は、コースの中で長期的な視野に立った選手および指導者の育成手法を学んだうえに、各自で各クラブのフィロソフィーに基づいて、実践のためにビジョン&ストラテジーの可視化や育成計画を構築しました。

今年、第1期生は自らが設計した選手および指導者の育成計画に基づいて、アカデミーのフットボール部門をマネジメントし、育成を推進していきます。

■選手教育

育成年代に限らず、Jクラブに所属する選手がサッカー選手としてだけでなく、一人の社会人として成長し続けるためには、フットボール領域を超えた選手教育を続けることが不可欠となります。

そのためには、クラブの中に長期的な視野に立って選手教育をする人材、ヘッドオブエデュケーションの存在が必要となります。プロジェクトDNAでは、「Jリーグヘッドオブエデュケーション養成コース(JHoE)」によってこのような人材を育てると同時に、開幕以降実施してきた新人研修会のプラスアップ、育成年代の選手教育プログラムを展開することで、選手教育に取り組んでいきます。

●2021年度のJリーグ新人研修

Jリーグは、当該シーズンの新人選手に対して、社会人としての自覚や行動を促すこと、Jリーグの理念の理解を通じてJリーグにふさわしいブランドを形成し行動を促すことを目的に、新人研修を実施しています。2021年度からは、従来の集合研修からオンラインにて年間を通して実施する方法に変更しました。

チアマンからのメッセージ、メディア対応について、リスクマネジメントなどLiveやオンデマンドなどの方法で、「Jリーグの選手とはどういう存在か」を考え、Jリーグの選手として、また一社会人として「価値を高め、守る」術を学んでいます。2月19日現在で204名の選手が研修に参加しています。

●セーフガーディングへの取り組み

育成年代からトップのチームを保有し、地域に根差したスポーツクラブとして活動するJクラブは、年齢、性別、立場など、多様な人材が所属し、それらを取り巻く多くの関係者が存在します。また、クラブの活動はクラブハウスや練習場の中だけでなく、練習、移動、試合など、日常から大会参加まで、様々な環境で活動が行われています。しかし、こうした活動は常にリスクと隣り合わせであると考えられています。

Jリーグは、クラブに関わる人たちが、安全な環境で安心して活動に取り組めるよう、「セーフガーディング」という概念を導入して、選手育成の環境からオン＆オフザピッチにおいて、誰もが前向きに安心して活動に取り組める環境を目指していきます。

【セーフガーディングとは】

誰もが人として尊重され、受け入れられ、認め合う環境をつくり、児童、青少年、弱い立場にある大人(スタッフも含む)が安心して活動でき、楽しい経験が得られるサッカー環境を提供することです。

〈ビジョン〉

オン＆オフザピッチにおいて、誰もが前向きに、安心して取り組むことができ、お互いを受け入れ、人の成長と模範的な振舞いを促すことのできるサッカー環境を設ける。

〈セーフガーディングの定義〉

●児童や青少年に対して

— 安心して活動できる環境づくりを推進し、危険から守る。— 虐待や不適切な取り扱いから守ること／健康や成長を阻害しない／成長を促す安全環境とケアを施した環境を提供する／すべての児童や青少年を最優先した行動をとれるようにする

●大人に対して

— 虐待などを見て見ないふりをしない、
— 安全な生活を送る権利を確保する。
— かかるスタッフや組織が協力し合う／保護責任の放棄や虐待発生を防ぐ／弱い立場にある大人が身体的・精神的・社会的に良好な状態で活動できるようにする

Jリーグが取り組む社会連携活動

はじめに

Jリーグは豊かなスポーツ文化の振興を理念に掲げ、地域社会と一緒にとなったクラブづくりを行うことをリーグの設立趣旨とし、理念を実現するための活動の総称として「Jリーグ百年構想」というスローガンを掲げて、スポーツ振興活動、ホームタウンとクラブを結びつける「ホームタウン活動」、社会と連携して地域の課題を解決する「社会連携活動」を行っています。リーグ設立から四半世紀を超え、間もなく30周年を迎えるあいだ、JリーグとJクラブは多岐にわたる活動を続けています。

手探りで始めた活動も長きにわたる継続で定着し、現在ではクラブとホームタウンを結ぶだけでなく、スポーツの垣根を越えて地域や社会の課題解決にまで発展しています。

■スポーツ振興活動～スポーツでもっと幸せな国へ～

「豊かなスポーツ文化の振興」を実現するために、Jリーグ開幕から3年後の1996年に「Jリーグ百年構想」を掲げ、スポーツ振興活動に本格的に取り組みはじめました。各クラブのホームタウンならではの施策をJリーグが支援し、今では10年、20年を超える施策もあります。

スポーツ振興活動では、サッカー以外のスポーツを積極的に推進し、子ども達やグラスルーツを対象とした大会から、全国レベルやオリンピックを目指す競技活動まで対象者や競技レベルは様々です。

今ではJリーグの支援から独立した活動や、クラブのリソースで発展している活動も多く、中でもトップレベルのスポーツシーンでの活躍が見られ、バスケットボール(Bリーグ)やフットサル(Fリーグ)に参加するチームもあります。今年、コンサドーレカーリングチームの全日本選手権3連覇したことは記憶に新しいところです。



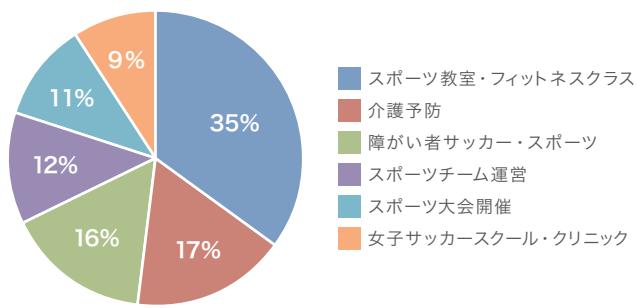
●2021年度のスポーツ振興活動

2021年は33クラブから88種類のスポーツ振興活動にJリーグとして支援することを予定しています。

スポーツ振興活動の対象となるスポーツは、サッカー以外の各種スポーツのチーム運営、年間を通じて行われるフィットネスクラスやスポーツ教室、10年、20年以上の実績を持つ大会など、多岐にわたっています。



【スポーツ振興活動実施割合】



●ホームタウンのコミュニティとして

2006年に施行された改正介護保険法に基づく介護予防普及事業の一環として、2007年から2009年に厚生労働省と連携して「Jリーグ介護予防事業」を展開して以来、子ども達や若年層を対象とした活動以外に、高齢者を対象とした健康体操教室などを継続して行っています。

こうした活動は、単に介護予防を目的としたスポーツ教室などにとどまらず、地域の人々が集まるコミュニティの場として親しまれています。



©湘南ベルマーレ
©徳島ヴォルティス

●多様性への取り組み。パラスポーツも充実

Jクラブのスポーツ振興活動では、年齢、性別、障がいの有無にかわらず、あらゆる人々にスポーツを楽しむ機会を創出しています。

スポーツ振興活動を本格化した当初から、障がい者向けのサッカーへの取り組みが行われ、視覚障がい者を対象としたブラインドサッカー、知的障がい者向け、電動車いすサッカーなど、チーム運営から大会の開催まで、年間を通じた活動が盛んに行われています。



©avispa.fukuoka
©横浜F・マリノス

●スポーツ基本法制定から10年

昭和36年に制定されたスポーツ振興法制定から50年後、そしてJリーグ設立から約20年後の2011年8月に、スポーツの推進のための基本的な法律として「スポーツ基本法」が成立されました。

Jリーグは30年前の1991年の設立当初から豊かなスポーツ文化の振興を理念に掲げ、現在では全57クラブが40の都道府県でプロサッカーチームの運営とともにスポーツ振興活動やスポーツを通じた地域振興活動を行っています。

今年予定されている東京オリンピック・パラリンピック終了後、日本国内では改めてスポーツの持つ価値や今後のスポーツの在り方が見直されることになると考えられます。

Jリーグはこれからも日本のスポーツ振興の旗振り役として活動していくきます。



■社会連携活動～スポーツが持つ「つなげる力」を信じて。

ホームタウンを持つプロスポーツリーグとして、地域社会の一員であり続けること。そのために、Jクラブはホームタウンと積極的にかかわる活動を行ってきました。

地域の一員であることを認めてもらうために始めた活動は、サッカー・スポーツを通じて街を活性化させること、「ホーム」となるスタジアムやクラブの施設を街の「機能」として活用すること、子ども達の勉強や学び、地域の産業のお手伝いをするなど、地域の課題を解決する

活動にまで発展していきました。その活動はJクラブだけにとどまらず、自治体や地域の企業や団体などが、それぞれの得意分野や機能、リソースを出し合って、クラブと一緒に活動に参加しています。

週末のスタジアムに何千人、何万人と人が集まるように、スポーツには、人と人や、スポーツ以外の何かと何かをつなげる力がある。こうした可能性を広げるための活動を今後も続けていきます。

●SDGsにつながるホームタウン活動

「ホームタウン活動」は、全クラブ合計で2019年には25,000回を超える活動が行われています。これらの活動を紐解くと、すべての人が健康になるための取り組みや、資源や環境問題対策など、社会が抱える課題に向き合うきっかけや課題解決につながる活動もあります。

2015年に国連が「持続可能な開発目標（SDGs）」を中心とする「持続可能な開発のための2030アジェンダを採択し、世界規模でアジェンダ実施のための行動が求められていますが、ホームタウン活動の中にも、SDGsにつながる活動があります。

Jリーグは2020年のホームタウン活動をSDGsに紐づけて分類し、活動がどのような社会課題の解決につながっているかをまとめ、2021年春に活動報告を予定しています。



●Jリーグの社会連携活動「シャレン！」

社会課題や共通のテーマ（教育、ダイバーシティ、まちづくり、健康、世代間交流など）に地域の人・企業や団体（営利・非営利問わず）・自治体・学校などとJリーグ・Jクラブが連携して取り組む社会連携活動を「シャレン！」と総称して2018年より本格的に取り組んでいます。

「シャレン！」活動は、3者以上の協働者と、共通価値を創る活動を想定しており、それらの社会貢献活動等を通じて、地域社会の持続可能性の確保、関係性の構築と学びの獲得により、活動にかかわる企業や団体の価値の再発見につながるものと考えています。

Jリーグでは、「Jリーグをつかって社会をよくする活動」についてたくさんの方々に関心を持っていただき、一緒に考えていただくために専用のホームページで、社会をよくするアイデアを募集しています。



【2020 JリーグYBCルヴァンカップ決勝より 左：センサリールーム（仮設）観戦企画（発達障がい児家族招待）／右：障がいの方の就労体験（精神・知的障がい者による事前準備）】

■復興支援活動 ～いつまでも忘れない。継続した支援のために。

2011年3月11日に起きた東日本大震災から、今年で10年が経ちます。10年の時を経てだいぶ復興は進みましたが、今なお震災の爪痕に苦しんでいる方は多くいます。

プロサッカーリーグに携わる自分たちにできることは何か。震災直後から「チカラをひとつに -TEAM AS ONE-」というスローガンを掲げ、物心両面から支援を行い、現在もスローガンの精神を引き継いで、大規模災害に対する支援を行っています。

●地域や国境を越えた支援の広がり

東日本大震災直後、応援するクラブの垣根を越えて各地域のホームタウンから被災地の支援に広がりました。Jリーグ設立から20年の中

で、Jクラブは地域に根差したスポーツクラブであり続け、応援するクラブは違っても、長い間クラブ同士、ファン・サポーター同士で交流を続けてきたからこそ、地域を越えた支援ができたと考えています。



【2011年3月：JFAハウスに集まったファン・サポーターによる支援物資分け作業／大宮選手バスによる物資の運搬】

ホームタウンのために戦う選手たちの姿は、被災された人たちや、支援に携わる人たちに大きな励みとなりました。また、Jリーグの国際事業として、Jクラブとともに地震の多いアジアの国々に防災の意義やノウハウを伝達する取り組みも行い、国境を越えた活動にまで広がっています。



●スポーツは心のライフルайнに。スタジアムは街のインフラに。

生活必需品の次に求められたのは、心から笑顔になれる時間や思い切り体を動かしてスポーツや遊びを楽しめる場所や機会でした。

Jクラブや選手たちは、これまでのホームタウン活動や普及活動で培ったノウハウを使って、被災地に笑顔を届ける活動を継続しています。

そして、街の大規模施設であるスタジアムが、避難場所や備蓄施設などとして活用されています。スタジアムやクラブの施設が街のインフラになることは、新たなスタンダードになりつつあります。



●TEAM AS ONEの精神をつなぐ

スローガンを掲げてから今日まで、スタジアムやJリーグ、Jクラブが主催するイベント・行事などで、「JリーグTEAM AS ONE募金」を行い、被災地のスポーツ環境を整えるための設備の寄付や、復興支援活動の原資としてきました。現在では、「TEAM AS ONE助成」として、2011年から2020年に起きた災害に対する復興支援活動の原資としています。

昨年3月11日からはクラウドファンディングを活用した募金窓口を新たに設置しています。コロナ禍においても「TEAM AS ONE」の精神をつなげ、被災した地域に寄り添った復興支援活動を今後も継続していきます。

対象となる災害：

平成23年東日本大震災、平成28年熊本地震、平成30年7月豪雨災害、

平成30年北海道胆振東部地震、令和元年東日本台風、令和2年7月豪雨など梅雨前線等による一連の災害



Jリーグの沿革

1988年3月	日本サッカーリーグ（JSL）が第1次活性化委員会設置
10月	第2次活性化委員会
1989年3月	JSLが、日本サッカー協会（JFA）に「日本サッカーリーグの活性化案」提案
6月	JFAが「プロリーグ準備検討委員会」設置
10月	プロリーグへの参加条件を立案
1990年3月	プロリーグ参加条件決定
6月	20団体より参加希望の回答あり
8月	プロリーグ検討委員会（91年1月まで6回開催）
1991年1月30日	「プロサッカーリーグ設立の経緯について」報道発表
2月14日	「プロサッカーリーグ参加団体（10団体）」発表
3月1日	「プロリーグ設立準備室」開設 (室長：川淵三郎・現JFA相談役)
7月1日	プロリーグ正式名称「株式会社日本プロサッカーリーグ（Jリーグ）」、Jリーグロゴマーク発表
11月1日	「社団法人 日本プロサッカーリーグ」設立 川淵三郎が初代チェアマンに就任
1992年3月6日	選手登録、移籍規定改定と「プロ選手統一契約書」を発表
5月	「Jリーグ・プレスプレビュー」開催。10クラブのプロフィール、ユニフォームなどJリーグの全容を発表
9月	Jリーグ初の公式試合「'92 Jリーグヤマザキナビスコカップ」開催。優勝：ヴェルディ川崎
1993年3月	ジェイ・エス・エル商事（株）から「株式会社Jリーグエンタープライズ」に社名変更
4月1日	Jリーグ規約施行
4月	「Jリーグ映像（株）」設立
4～5月	日本代表がFIFAワールドカップアメリカ'94 アジア地区1次予選を突破
5月	初の外国人審判員マーチン・ボデナム氏（イングランド）招へい
5月15日	Jリーグ開幕 プロサッカーとして初のリーグ戦「'93 Jリーグサントリーシリーズ」がスタート
7月	Jリーグ初のオールスター・サッカー「'93 JリーグKodakオールスター・サッカー」（神戸ユニバー記念競技場）開催
10月	FIFAワールドカップアメリカ'94アジア地区最終予選敗退
12月	「Jリーグフォト（株）」設立
1994年	ベルマーレ平塚、ジュビロ磐田が新加入／12クラブ
3月	「延長サドンデス方式」を「Vゴール」に名称変更
10月	「スポーツターフ研究会」発足
1995年	柏レイソル、セレッソ大阪が新加入／14クラブ
8月	横浜フリューゲルスがアジアスーパーカップ優勝
12月	「セキュリティ研究会」発足
1996年	京都パープルサンガ、アビスパ福岡が新加入／16クラブ
3月	「Jリーグ百年構想」をキーワードにした、プロモーション展開発表
5月	「株式会社日本フットボールヴィレッジ（Jヴィレッジ）」設立
1997年	ヴィッセル神戸が新加入／17クラブ
1998年	コンサドーレ札幌が新加入／18クラブ FIFAワールドカップフランス'98に日本代表初出場



[1991年1月30日] 「プロサッカーリーグ設立の経緯について」報道発表



[1992年11月23日] '92 Jリーグヤマザキナビスコカップ決勝



[1993年5月15日] Jリーグ開幕



[1996年3月]
「Jリーグ百年構想」をキーワードにした
プロモーション展開発表



[1998年6月] 日本代表がFIFAワールドカップに初出場（フランス）

1999年 2月	横浜マリノスと横浜フリューゲルスが合併 1・2部制開始 (J1・16クラブ) 鹿島アントラーズ、浦和レッズ、ジェフユナイテッド市原、 柏レイソル、ヴェルディ川崎、横浜F・マリノス、 ベルマーレ平塚、清水エスパルス、ジュビロ磐田、 名古屋グランパスエイト、京都パープルサンガ、 ガンバ大阪、セレッソ大阪、ヴィッセル神戸、 サンフレッチェ広島、アビスパ福岡 (J2・10クラブ) コンサドーレ札幌、ベガルタ仙台、モンテディオ山形、 大宮アルディージャ、FC東京、川崎フロンターレ、 ヴァンフォーレ甲府、アルビレックス新潟、 サガン鳥栖、大分トリニータ
4月	ジュビロ磐田がアジアクラブ選手権優勝
6月	Jリーグゼネラルマネージャー(GM)講座が始まる
11月	ジュビロ磐田がアジアスーパーカップ優勝
2000年	水戸ホーリーホックがJ2に新加入 J1・16クラブ、J2・11クラブ
2001年	横浜FCがJ2に新加入／J1・16クラブ、J2・12クラブ
2002年	2002 FIFAワールドカップを日本と韓国が共同開催 「Jリーグ・アカデミー」発足 「Jリーグキャリアサポートセンター」発足 JFAが「スペシャルレフェリー(SR)」制度導入。岡田正義氏、 上川徹氏の2人が初代SRに
7月	鈴木 昌が第2代 Jリーグチアマンに就任
2003年 3月	日本・中国・韓国の3カ国のリーグチャンピオンなどが競う 「A3チャンピオンズカップ」が始まる 延長戦(Vゴール)が廃止となる
9月	東京都文京区本郷に「JFAハウス」完成 JFA、Jリーグ、各種サッカー関係団体が一堂に集まる
2005年	J1が2ステージ制から1ステージ制へ ザスパ草津、徳島ヴォルティスがJ2に新加入 J1・18クラブ、J2・12クラブ
2006年	愛媛FCがJ2に新加入／J1・18クラブ、J2・13クラブ
3月	Jリーグ準加盟制度発足
6月	2006 FIFAワールドカップドイツに日本代表出場
7月	鬼武 健二が第3代 Jリーグチアマンに就任
2007年 4月	Jリーグ U-13が始まる
11月	浦和レッズがAFCチャンピオンズリーグ優勝
12月	FIFAクラブワールドカップに浦和レッズが出場(3位)
2008年	ロアッソ熊本、FC岐阜がJ2に新加入 J1・18クラブ、J2・15クラブ JリーグU-14が始まる Jリーグ映像㈱から「㈱Jリーグメディアプロモーション」に社名変更
11月	ガンバ大阪がAFCチャンピオンズリーグ優勝
12月	FIFAクラブワールドカップにガンバ大阪が出席(3位)
2009年	栃木SC、カターレ富山、ファジアーノ岡山がJ2に新加入 J1・18クラブ、J2・18クラブ アジアサッカー連盟加盟国の中選手登録枠(アジア枠)を導入
3月	Jリーグ公式試合通算入場者数が1億人を突破
12月	鹿島アントラーズが史上初のJ1リーグ戦3連覇を達成



[1999年] 1・2部制開始



[2002年] FIFAワールドカップ 日韓共催



[2002年] Jリーグアカデミー発足 ※写真はJリーグU-13



[2007年] 浦和レッズがAFCチャンピオンズリーグにJクラブとして初優勝。
翌年はガンバ大阪が優勝



[2009年] Jリーグ公式試合通算入場者数が1億人を突破

2010年	ギラヴァンツ北九州がJ2に新加入 J1・18クラブ、J2・19クラブ
6月	2010 FIFAワールドカップ南アフリカに日本代表出場
7月	大東 和美が第4代 Jリーグチェアマンに就任
2011年	ガイナーレ鳥取がJ2に新加入 J1・18クラブ、J2・20クラブ
3月	東日本大震災発生(3/11)。 4月23日まで公式試合の開催を中止
11月	FIFAクラブワールドカップに柏レイソルが出場(4位)
2012年	FC町田ゼルビア、松本山雅FCがJ2に新加入 J1・18クラブ、J2・22クラブ
2月	クラブライセンス制度導入
3月	20回目のJリーグ、Jリーグヤマザキナビスコカップ開催
4月	「公益社団法人 日本プロサッカーリーグ」へ移行
12月	FIFAクラブワールドカップにサンフレッチェ広島が出場(5位)
2013年	V・ファーレン長崎がJ2に新加入。FC町田ゼルビアがJFLに降格／J1・18クラブ、J2・22クラブ
12月	中村俊輔(横浜F・マリノス)が史上初となる2度目のJリーグ最優秀選手賞を受賞
2014年	カマタマーレ讃岐がJ2に新加入 明治安田生命J3リーグがスタート グルージャ盛岡、ブラウブリッツ秋田、福島ユナイテッドFC、 FC町田ゼルビア、Y.S.C.C.横浜、SC相模原、 AC長野パルセイロ、ツエーゲン金沢、藤枝MYFC、 FC琉球がJ3に新加入／J1・18クラブ、J2・22クラブ、 J3・11クラブ Jリーグ・アンダーアジア選抜を創設、明治安田生命J3リーグに参加 Jリーグ提携リーグの選手登録枠(提携国枠)を導入
1月	村井 滉が第5代 Jリーグチェアマンに就任 専任理事を新設
6月	2014 FIFAワールドカップブラジルに日本代表出場
2015年	レノファ山口FCがJ3に新加入／J1・18クラブ、J2・22クラブ、J3・12クラブ J1の大会方式を1ステージ制から2ステージ制および チャンピオンシップに変更 J1・J2・J3リーグ戦を「明治安田生命Jリーグ」として、 チャンピオンシップを「明治安田生命Jリーグチャンピオンシップ」として開催
5月	Jリーグヒューマンキャピタル開講
11月	大久保嘉人(川崎フロンターレ)が史上初となる3年連続 3回目の得点王を獲得
12月	FIFAクラブワールドカップにサンフレッチェ広島が出場(3位)
2016年	鹿児島ユナイテッドFCがJ3に新加入／J1・18クラブ、 J2・22クラブ、J3・13クラブ J1・J2クラブのU-23チーム(FC東京、ガンバ大阪、 セレッソ大阪)がJ3リーグに参加 Jサテライトリーグを再開
6月	JリーグヤマザキナビスコカップがJリーグYBCルヴァン カップに名称を変更 明治安田生命J3リーグとJリーグYBCルヴァンカップで 追加審査を導入
9月	(一財)スポーツヒューマンキャピタルを設立
12月	FIFAクラブワールドカップに鹿島アントラーズが出場(準優勝)



[2011年3月11日] 東日本大震災発生。4月23日まで公式試合の開催を中止。
「TEAM AS ONE」をスローガンにした復興支援活動を実施



[2013年] 中村俊輔(横浜FM／当時)が史上初となる2度目の最優秀選手賞を受賞



[2014年] 明治安田生命J3リーグがスタート



[2015年] 大久保嘉人(川崎F／当時)が
史上初となる3年連続3回目の得点王を受賞



[2016年] FIFAクラブワールドカップで鹿島アントラーズが準優勝

2017年	アスルクラロ沼津がJ3に新加入／J1・18クラブ、J2・22クラブ、J3・14クラブ Jリーグ提携リーグの国籍を有する選手の登録数、エントリー数を日本人と同じ扱いに
1月	(株)Jリーグデジタル設立 2017 Jリーグ アジアチャレンジinタイを開催
2月	J1リーグが3年ぶりに1ステージ制で開幕
3月	25回目のリーグカップ戦(JリーグYBCルヴァンカップ)が開幕
4月	(株)Jリーグホールディングス設立。関連会社を再編 (株)Jリーグマーケティング設立 (株)Jリーグエンターブライズ、Jリーグフォト(株) (株)Jリーグデジタルエンタテインメント、 (株)J ADVANCEが解散
7月	明治安田生命 Jリーグワールドチャレンジを開催(浦和レッズ vs ボルシア・ドルトムント / 鹿島アントラーズ vs セビージャFC)
11月	浦和レッズがAFCチャンピオンズリーグ優勝
12月	FIFAクラブワールドカップに浦和レッズが出場(5位)
2018年 5月	Jリーグ開幕25周年 eスポーツに参入。明治安田生命eJ.LEAGUE開催
6月	2018 FIFAワールドカップロシアに日本代表出場
11月	鹿島アントラーズがAFCチャンピオンズリーグ優勝
12月	鹿島アントラーズがFIFAクラブワールドカップ出場(4位) 川崎フロンターレより3年連続でJリーグ最優秀選手賞選出。同一クラブからの3年連続は史上初
2019年	ヴァンラーレ八戸がJ3に新加入／J1・18クラブ、J2・22クラブ、J3・15クラブ ホームグロウン制度導入 外国籍選手の選手登録数制限を廃止。試合エントリー数、試合出場数の上限をJ1は5人、J2・J3は4人に変更 ルヴァンカッププライムステージとJ1参入プレーオフでビデオアシstantレフェリー(VAR)導入を決定
12月	1シーズンのJリーグ公式試合入場者数総数が11,104,480人*となり初めて1,100万人を突破。J1は平均入場者数が初めて2万人を突破し、過去最高の20,751人に
2020年	FC今治がJ3に新加入／J1・18クラブ、J2・22クラブ、J3・16クラブ 明治安田生命J1リーグでVAR導入。(6月27日の再開以降は導入を見送り)
1月 1日	株式会社Jリーグホールディングスが吸収合併存続会社とし、子会社である株式会社Jリーグデジタル、株式会社Jリーグメディアプロモーション、株式会社Jリーグマーケティングの3社を吸収合併消滅会社商号を「株式会社Jリーグ」に変更
2月	新型コロナウイルス感染症拡大のため、2月26日以降の公式試合を延期し、6月27日に再開
3月	日本野球機構(NPB)と新型コロナウイルス対策連絡会議創設 2020シーズンの明治安田生命Jリーグの結果に伴う2021シーズンのJ2、J3への降格を廃止 FC東京U-23チームがリーグ戦再開後、明治安田生命J3リーグへの参加を辞退
8月、9月	三浦知良選手(横浜FC)が、53歳でリーグカップ戦(8月5日)、J1リーグ(9月23日、12月19日)の最年長出場記録を更新 Jユースカップ、Jリーグインターナショナルユースカップなど育成組織の大会開催を中止
2021年	テグバジャーロ宮崎がJ3に新加入／J1・20クラブ、J2・22クラブ、J3・15クラブ 明治安田生命J3リーグへのU-23チーム参加を廃止

* AFCチャンピオンズリーグ含まず
※クラブ名、大会名は当時のもの



[2017年] 25回目のリーグカップ戦(JリーグYBCルヴァンカップ)が開幕

[2018年] Jリーグ開幕25周年



[2017年] 浦和レッズが2度目のACL制覇

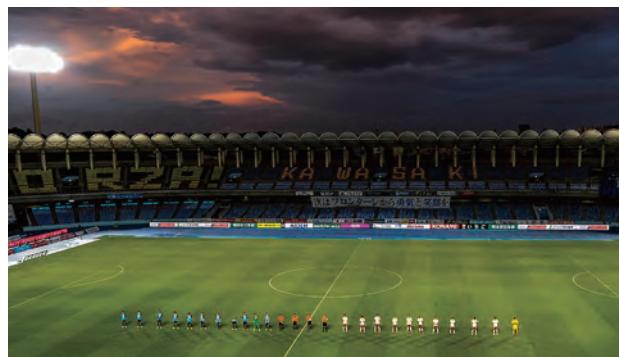
[2018年] 鹿島アントラーズがACL初優勝



[2018年] Jリーグがeスポーツに参入。明治安田生命eJ.LEAGUEを開催



[2019年] 1シーズンのJリーグ公式試合入場者総数が初めて1,100万人を突破。
J1は初の平均2万人突破



[2020年] 新型コロナウイルス感染症拡大のため、2月26日開催試合より6月27日まで公式試合を延期。6月27日より無観客で再開

歴代優勝クラブ

	J1リーグ ※1	1stステージ ※2	2ndステージ ※2	ルヴァンカップ ※3	J2リーグ ※4	明治安田生命 J3リーグ
1992	——	——	——	ヴェルディ川崎	——	——
1993	ヴェルディ川崎	鹿島アントラーズ	ヴェルディ川崎	ヴェルディ川崎	——	——
1994	ヴェルディ川崎	サンフレッチェ広島	ヴェルディ川崎	ヴェルディ川崎	——	——
1995	横浜マリノス	横浜マリノス	ヴェルディ川崎	——	——	——
1996	鹿島アントラーズ	——	——	清水エスパルス	——	——
1997	ジュビロ磐田	鹿島アントラーズ	ジュビロ磐田	鹿島アントラーズ	——	——
1998	鹿島アントラーズ	ジュビロ磐田	鹿島アントラーズ	ジュビロ磐田	——	——
1999	ジュビロ磐田	ジュビロ磐田	清水エスパルス	柏レイソル	川崎フロンターレ	——
2000	鹿島アントラーズ	横浜F・マリノス	鹿島アントラーズ	鹿島アントラーズ	コンサドーレ札幌	——
2001	鹿島アントラーズ	ジュビロ磐田	鹿島アントラーズ	横浜F・マリノス	京都パープルサンガ	——
2002	ジュビロ磐田	ジュビロ磐田	ジュビロ磐田	鹿島アントラーズ	大分トリニータ	——
2003	横浜F・マリノス	横浜F・マリノス	横浜F・マリノス	浦和レッズ	アルビレックス新潟	——
2004	横浜F・マリノス	横浜F・マリノス	浦和レッズ	FC東京	川崎フロンターレ	——
2005	ガンバ大阪	——	——	ジェフユナイテッド千葉	京都パープルサンガ	——
2006	浦和レッズ	——	——	ジェフユナイテッド千葉	横浜FC	——
2007	鹿島アントラーズ	——	——	ガンバ大阪	コンサドーレ札幌	——
2008	鹿島アントラーズ	——	——	大分トリニータ	サンフレッチェ広島	——
2009	鹿島アントラーズ	——	——	FC東京	ベガルタ仙台	——
2010	名古屋グランパス	——	——	ジュビロ磐田	柏レイソル	——
2011	柏レイソル	——	——	鹿島アントラーズ	FC東京	——
2012	サンフレッチェ広島	——	——	鹿島アントラーズ	ヴァンフォーレ甲府	——
2013	サンフレッチェ広島	——	——	柏レイソル	ガンバ大阪	——
2014	ガンバ大阪	——	——	ガンバ大阪	湘南ベルマーレ	ツエーゲン金沢
2015	サンフレッチェ広島	浦和レッズ	サンフレッチェ広島	鹿島アントラーズ	大宮アルディージャ	レノファ山口FC
2016	鹿島アントラーズ	鹿島アントラーズ	浦和レッズ	浦和レッズ	北海道コンサドーレ札幌	大分トリニータ
2017	川崎フロンターレ	——	——	セレッソ大阪	湘南ベルマーレ	ブラウブリッツ秋田
2018	川崎フロンターレ	——	——	湘南ベルマーレ	松本山雅FC	FC琉球
2019	横浜F・マリノス	——	——	川崎フロンターレ	柏レイソル	ギラヴァンツ北九州
2020	川崎フロンターレ	——	——	FC東京	徳島ヴォルティス	ブラウブリッツ秋田

※1：1998年までは1部制、2015年から明治安田生命J1リーグ

※2：1995年まではそれぞれサントリー・シリーズ、NICOSシリーズ

※3：2016年6月21日よりヤマザキナビスコカップから改称

※4：2015年から明治安田生命J2リーグ



2020明治安田生命J1リーグ チャンピオン [川崎フロンターレ]



2020 JリーグYBCルヴァンカップ カップウィナー [FC東京]



Jリーグパートナー

■ Jリーグタイトルパートナー

明治安田生命保険相互会社

■ Jリーグオフィシャルブロードキャスティングパートナー

DAZN Japan Investment 合同会社

■ Jリーグトップパートナー

株式会社アイデム

ルートインジャパン株式会社

イオンリテール株式会社

Electronic Arts Inc.

株式会社NTTドコモ

株式会社コナミデジタルエンタテインメント

いちご株式会社

■ Jリーグ百年構想パートナー

朝日新聞社

■ リーグカップパートナー

ヤマザキビスケット株式会社

■ スーパーカップパートナー

富士ゼロックス株式会社

■ Jリーグオフィシャルエクイップメントパートナー

アディダス ジャパン株式会社 ／ 株式会社モルテン

■ スポーツ振興パートナー

独立行政法人日本スポーツ振興センター

■ Jリーグオフィシャルチケッティングパートナー

ぴあ株式会社

■ JリーグオフィシャルECプラットフォームパートナー

楽天株式会社

■ Jリーグオフィシャルテクノロジーパートナー

NTTグループ

■ Jリーグサポートティングカンパニー

ヤフー株式会社

デロイト トーマツ ファイナンシャルアドバイザリー合同会社 ／

デロイト トーマツ コンサルティング合同会社

データスタジアム株式会社

株式会社IMAGICA GROUP／株式会社イマジカ・ライブ

*2021年2月1日現在



公益社団法人 日本プロサッカーリーグ
www.jleague.jp/